

曲目解説

交響曲第3番「英雄」

ベートーベン

この光輝に満ちた交響曲は、1805年4月7日（日）、アン・デア・ウィーン劇場において、人々の前に初めてその姿を現わしました。それは、人々を存在の根底から激しく揺り動かし、圧倒的な力強い印象を与えたのです。「英雄」交響曲は正しく革命的作品であると言えます。

1801年、「田園」と呼ばれるピアノ・ソナタを完成した時、ベートーベンは、友人のバイオリニスト、クランプホルツに、「私は今日までの自分の作品に満足していない。今日から新しい道を開拓するつもりだ」と述べています。その「新しい道」が決定的に刻印された作品がこの「英雄」だったわけですが、そこに至る道が平坦なものではありません。ベートーベンの望みは、自分に都合よく簡単に手に入るような凡庸なものではなかったのです。さらに彼の前には、聾疾の悪化という絶望的な障害が立ちふさがっていました。このような様々の困難を克服して作り上げられた「英雄」交響曲は、音楽史上の輝かしい記念碑となりました。この曲を聴く者は、そこに、外から与えられた障害（聾疾）に打ち勝ち、さらに自ら自分自身に課した困難を乗り越えて常に前進する人間の驚異的な意志の力を感じないわけにはいきません。

全曲で50分に及ぶこの曲は、各楽章が有機的に構成され、第一楽章冒頭に提示される音型が様々に変化、発展して全曲にその姿を現わします。又その和声計画は綿密を極めていますし、細部の一音符も全体に関わる意味を担っています。その高い芸術的完成は我々に人間の精神の高貴な価値を認識させるだけの力を持っているのです。

組曲「ペレアスとメリザンド」

フォーレ

この曲は、フォーレがベルギーの劇作家モーリス・メーテルリンクの戯曲「ペレアスとメリザンド」のロンドンにおける初演に際して、間奏曲として作曲したものです。後にそれは、交響組曲に編曲され、作品78として別に出版された「シシリエンヌ」というチェロ独奏の曲をオーケストレーションして第3楽章に加え、作品80としてまとめられました。全曲には、ペレアスとメリザンドの宿命的な愛とふたりの悲劇的な死が美しく抒情的に描き出され、フォーレの音楽の魅力が満ちあふれています。

交響曲第32番

モーツァルト

1779年1月、モーツァルトは父親にせきたてられ、パリからふたたびザルツブルクに戻りました。1774年5月以来、モーツァルトはいわゆる「パリ交響曲」を除いて、交響曲のジャンルでは作品を書いていませんでした。この長い沈黙のあとで書かれた最初の交響曲が、今晚演奏する第32番（ト長調K.318）です。しかし、この作品は、急緩急の三部分が切れ目なしに近づいている点で、パリのオペラ・コミックで愛好された序曲の形に近いものです。モーツァルトがどのような理由でこの〈序曲＝交響曲〉という混合形式を選んだのかについては、様々な見解が提出されているようですが、ここではそういった専門的な問題よりも、活気に満ち、変化に富んだ曲想に注目したいところです。